

新国立競技場問題における「建築専門誌」の報道分析

(株)古今東西社 中西 正紀

1. 序文～「先導者」としての建築メディア

2015年7月17日の「ザハ・ハディド案全面白紙化」を頂点に新国立競技場問題は日本全体で強い関心と呼び、それは現在も続いている。本稿ではその中で、専門誌として一連の議論を先導しうる立場にあった建築誌での議論に注目し、その傾向を分析した。言うまでも無く建築は土木の隣接分野であり、本稿での分析は土木技術者のあり方にも影響を与える。

2. 『日経アーキテクチュア』の傾向

2.1 細野透の「榎文彦＝良心」論

『日経アーキテクチュア』（以下、『アーキ』）は日本経済新聞グループの日経BP社が刊行し、月2回での発行は2016年に1000号を超えた。僚誌の『日経コンストラクション』等と共に建築・地域開発等の専門情報を記載し、約3万部が発行されている。

その報道傾向資料として、最初に元同誌編集長の細野透によるコラムを挙げる。細野は2006年の独立後も日経BP社の公式サイト内「SAFETY JAPAN」(SJ)に寄稿を続けている。このコラムのうち、新国立競技場問題を中心に扱った物を<表1>で抜粋した。執筆年はいずれも2015年である。

<表1> 「SJ」細野コラムでの新国立問題リスト

番	掲載日	記事名
(1)	7/16	新国立無駄遣い—安藤忠雄氏が見逃したザハ案の食い虫リスク
(2)	7/17	新国立ザハ案を巡る日本スポーツ振興センターのやりたい放題
(3)	8/25	東大教授の正当性をかけた安藤忠雄「ザハ案」と榎文彦「良心案」の闘い
(4)	9/14	新国立「女王ザハ」の怒りを鎮める日建設計の騎士道精神
(5)	9/24	新国立の犠牲者ザハが退場するに際し、女王にふさわしい礼儀は欠かせない
(6)	12/16	隈研吾氏の足跡み、伊東豊雄氏の新境地—新国立競技場2案を比較
(7)	12/22	新国立の勝者を左右した「大天狗」と「小天狗」

それまで新国立問題を触れなかった細野は「白紙化」前日に(1)、当日に(2)を書き、その後も(5)まで連続投稿した。その論調は一貫して、ハディド案、及びそれを採用した安藤忠雄への批判と、この流れを作った「建築界の良心」榎文彦への賛美である。

これが最も顕著なのは(3)である。細野が「花形」と評する東大建築学科建築意匠担当教授への安藤の就

任(1997年)について、安藤なら人事権を持つ教授達の影が薄くならない点が伊東豊雄より勝るという「風の便り」<原文ママ、以下同>を紹介し、周囲の打算の産物という印象を読者に与えた。一方、ハディド案のモンスター性を一早く見抜いた榎は「冷静かつ良心的に議論をリードし(中略)榎文彦氏の尊敬すべき立ち居振る舞いは、東京大学建築学科およびその出身者たちが誇りを持って語り継ぐことができる、貴重な遺産(レガシー)になった」と強く称賛した。(3)には建築関係者の一覧表も掲載されていた。これは安藤の最終学歴が高卒で、その擁護者である鈴木博之(建築史家)と内藤廣(土木工学科)も「傍流」と示し、丹下健三門下の榎こそ正統的な東大建築学科の後継者だという細野の主張を補足する物だった。

2.2 伊東豊雄の「敗退」と細野の誤算

しかし、景観保護等を理由にハディド案での新国立建設に反対し、旧国立の改修を求めた榎やその同調者達の主張はどれも現実性を欠いていた。榎は『アーキ』誌2014年7月10日号で旧国立の改修と「国際子供スポーツセンター」新設を提案し、「子供オリンピック」「子供サッカーワールドカップ」開催を掲げたが、現実には「国際ユース五輪」や「年代別ワールドカップ」が世界各国の持ち回りで開かれ、東京開催恒常化の可能性は絶無だった。メインスタンド二層化で旧国立の8万席への増築を求めた伊東案では屋根の充足率が五輪スタジアムの現行基準を満たせない上、バックスタンドの都道被りという「既存不適格」を解消できなかった。そして、榎の代弁者として行動し、「白紙化」の際には1000億円以内での整備と自薦した大野秀敏による旧国立ベース復刻案は、洋梨型に膨らんだスタンド形状が陸上競技場として必須の設置基準をそもそも満たせなかったのである。「白紙化」後の(4)と(5)は「良識の勝利」という高揚感の中での執筆である。特に(5)は榎が9月16日に

キーワード：新国立競技場、地域計画、建築、専門誌、報道、東京大学

連絡先：〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-24-2-2F、電話：03-3704-0531

『アーキ』のウェブ版で「ザハ・ハディドは日本的曖昧さの犠牲者だった」とする慰労コラムを発表した後だった。以後、「敗者」かつ「外国人」のハディドへの攻撃は止まった。『アーキ』本誌でも10月10日号特集「『新国立』破綻の構図」でハディド事務所インタビューに「コスト高の汚名を着せられたザハ」と小見出しを付け、2016年3月31日のハディド急逝時には追悼記事を載せて「崇り封じ」を行なった。しかし、2015年12月22日に結果発表された新国立の再設計コンペでは伊東ではなく、(3)内の一覧表で中立扱いだった隈研吾の案が採用された。(6)で「足踏み」と冷笑した隈案の勝利に対し、細野は(7)で東大建築学科OB会の「木葉会」から関連人事を解説し、特別荣誉教授の安藤を「大天狗」と呼んだ上で、建築家なら伊東案を評価すると付言した。無論、(3)では傍流扱いした安藤への評価は矛盾を含むが、これが細野や『アーキ』誌の率直な主張であった。

2. 3 大江匡の「駒沢改修案」の画像操作

『アーキ』誌の傾向を示す別例が大江匡である。大江は(株)プランテックアソシエイツの創業者かつ代表取締役会長兼社長として年商70億円のグループを率いる、建築界の成功者である。

大江はツイッターで2016年1月1日と同年4月6日の二度、新国立に代わる五輪スタジアムとして駒沢陸上競技場の改修案を提示した。高速道路や公共交通機関が多く使え、敷地に余裕がある、しかも建築費は500億円で済むという主張だったが、その致命的な欠陥は添付された<写真1>で明確になった。

<写真1>大江による「駒沢改修」完成予想写真



<写真1>での「新駒沢」(左上)は既存施設の2万席に4.5万席を増設して五輪のメイン会場となり、かつ新国立では仮設となる陸上用サブトラック(下)も常設できると主張した。しかし「新駒沢」の画像は

味の素スタジアム空撮のはめ込みで、しかもこの部分だけ約3分の2に縮小している。サブトラックと比較するとその画像操作は明白である。

この大江が2016年5月20日に行なわれた『アーキ』誌の創刊40周年記念シンポジウムの特別講演者だった。伊東に続いて登壇した大江はこの場で「駒沢改修案」を披露したとされる。その模様を採録した同誌7月14日号では省略されたが、実現可能性の根拠が全く無い計画の披露を記念講演で披露させたのは、実証性より自誌への賛同を重視した『アーキ』誌の編集傾向を強く反映させた結果と言えよう。

3. 『建築ジャーナル』の傾向

本稿ではもう一誌、『建築ジャーナル』を取り上げる。1978年の創刊以来「市民のための建築」の編集方針を掲げるこの月刊誌は、日経グループの一員で企業・ビジネス界が中心の『アーキ』誌と対照的である。

『ジャーナル』誌は2014年3年間で計8回、新国立と五輪で特集記事を組んだ。当初は中立的だった題名は2015年に入り「ニッポンのブサイク」(5月号)と批判派へ大きく踏み込み、SJ(3)では細野から「基本的な資料として役立つ」「ザハ案批判の立場から何回も特集を組んできた」と評価された。同コラムでは鈴木博之批判の根拠にも同誌が使われている。上記の計8回の特集号では合計33本の署名記事があったが、その中で唯一3本を投稿したのが森山高至だった。紙幅の関係で詳細は省くが、森山も槇を「世界最高峰の建築家」と絶賛する一方、安藤に対しては強い言葉で非難を続けてきた。

そして、ハディド案の特徴だったキールアーチは2本で1000億円という彼の主張は、他の多くと共に偽りであった事は既に明らかとなっており、その森山を新国立問題報道の中軸に置いた事で『ジャーナル』誌自体の信用性も大きく損なわれたのである。

4. 結語～「扇動者」化による建築界の失墜

2誌の報道傾向分析により、自然科学とマスメディアの双方で必須の「実証と確認」を怠った建築専門誌は新国立問題で多くの誤認や不公平な報道を重ねた事を確認した。「扇動者」しか持てなかった建築界は冷静かつ客観的な議論の先導役という社会的責任を果たせず、その信用は失墜したのである。

専門誌自体が一部で重複する土木工学では、この教訓は活かされなければならないと考える。